

---

# 年越しシンデレラ

塚本リユーヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

年越しシンデレラ

### 【Nコード】

N0430BA

### 【作者名】

塚本リユーヤ

### 【あらすじ】

12月ももう終わり。

来年卒業となる中学3年生の由海は、同じクラスの凜の事をずっと思い続けているが、声をかける事が出来ずにいた。しかし終業式も終わり、下校の途中で親友の怜奈がある提案を持ち出す。由海の恋の行方は……。

## 始まり（前書き）

魔法にかけられた由海は凜とどんな関係になっていくのか……。最後はまさかの展開に！？

中学生の切ない（？）ラブストーリーです。  
ぜひご覧ください。

## 始まり

雪城<sup>ゆきしろ</sup>中学校3年3組の教室で、山崎<sup>やまざき</sup>由海は小さなため息をついていた。

2学期の終業式が終わり、明日から冬休みに入る。

そして今は終学活の時間であり、この時間が終われば下校となる。

（はあ……今年も凜君と話せなかった……）

そう思いながら見つめる視線の先では、クラスで人気の美男子、吉村<sup>よしむらりん</sup>凜が頬杖をつきながら先生の話を聞いている。由海は毎日、凜の事を見つめ続けているが、向こうが気づく様子は全く無い。

そうしているうちに終学活の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

「よしそれじゃ、みんな健康に気を付けて、始業式には元気に登校してくるように。良いお年を。さようなら」

そう言って先生が話を締めくくると同時に、学級委員が号令をかけ、クラス全員が一斉にあいさつをして解散となり、次々と教室を出て行った。

由海もすでに帰り支度を済ませていたので、続いて教室を出ようとしたが、

「おーい、由海」

と呼びとめられた。

振り返らなくても誰なのかは検討がついていた。振り返ってみるとやはりそこには親友の高橋<sup>たかはし</sup>怜奈<sup>れいな</sup>の姿があった。怜奈とは1年生の時に同じクラスとなり、それから親しくなった。2年生からは違うクラスになってしまったが、今でも二人は、お互いに特別な存在である。

「一緒に帰ろっ」

と怜奈に言われたので、

「うん、いいよ」

と由海は答え、怜奈とともに歩きだした。

そして学校の校門を抜け、お決まりの下校ルートに差し掛かった頃に、突然、怜奈が声をかけてきた。

「そういえばさあ、由海、今年も凜君と話せなかったんでしょ」

由海は1年生の時に凜に一目ぼれした時、真っ先にそのことを怜奈に告げていた。

「うん……」

そう答えるしかなかった。事実、凜と同じクラスになったものの、1年間一言も話せていなかった。

すると怜奈は、由海が全く予想もしていなかった一言を言った。

「しょうがないなあ、舞踏会に行けないあわれな娘のために、私が魔法をかけてやるか」

「え？」

意味が理解できなかった。「魔法をかけ」るとは、一体どういうことなのだろうか。

「由海、最近クラスで流行ってるサイトやってるでしょ？」

「ああ、あのチャットで離れた所にいる友達といつでも話せるってやつ？」

そのサイトの事なら由海も知っていた。無料登録の会員制のサイトで、ニックネームを検索して仲間を見つけることができ、一年ほど前からクラスの間で話題になり、由海も半年前から始めていたのだ。

さらに怜奈はこう続けた。

「そうそう、それ。でさ、今日ね、2組の岡島さんが話してるの聞いちゃったんだけど、凜君もそのサイト、最近始めたらしいよ」

「えっ、嘘!？」

思わぬ情報に心が舞い踊る。

「ほんとだよ。『ヨシムリン』っていう名前でやってるんだって。これって凜君と話す絶好のチャンスだと思わない」

そのネーミングセンスはどうかとも思ったが、せつかくの凜と話

すチャンスなのだ。由海はそれから、ヨシムリンに関する事を怜奈から教えてもらった。

そうして、しばらく怜奈と話しているうちに、分かれ道に差し掛かった。

由海の家は左に曲がった先にあるが、怜奈の家は右の道の先にある。

「あつ、ここまでだね。じゃあね由海。良いお年を〜」

最後の「良いお年を〜」が、なんとなく意味ありげに聞こえた。

「じゃあね〜」

そういつて怜奈と別れ、左の道へ曲がると同時に、由海は一目散に駆けだした。

急いで家に帰り、

「ただいまっ」

と言いながら階段を駆け上がり二階にあるマイルームに入ると、着替えるのも忘れて机の上にあるノートパソコンを開き、電源ボタンを押した。

待ち受け画面が開くまでの時間をこれほどじれったく感じたことはなかった。

下の階から母の声が聞こえてくる。

「由海ちゃん、どうしたの？なんか騒がしかったけど」

「ごめん、お母さん。急いでるの」

そう答えている間にやっとパソコンが立ち上がった。

インターネットのウィンドウを開くと、例のサイトに接続し、検索の欄に怜奈から教えてもらった凜のニックネームを入力し、検索ボタンを押した。

すると、「ヨシムリン」という名が1件だけヒットした。

期待に胸を膨らませながら、そのリンクをクリックしてみる。すぐにページ移動が完了した。

プロフィールを確認すると、中学3年生の男性で、このサイトは始めたばかりだという。怜奈の情報と一致する。彼で間違いなさそ

うだ。

ヨシムリンのチャットのページに移ると、ちょうど彼は友達と会話をしているところだった。話しかけるなら今しかない。

だが、由海はそれをするのをためらっていた。

（もしも、私だってバレたら……もし、まったく相手にされなかったら……）

しかし、由海は来年、卒業となる。凜と同じ高校に入ることはいだらうし、もう会うこともないだらう。つまり、この機を逃せばもう一生、凜と話す事が出来なくなるかもしれないのだ。

それに、と由海は思い改める。ここはネットの世界なのだ。どれだけ失敗しても現実に影響することはほとんどない。

ややこしいニックネームを付けるのも面倒だったため、そのまま「ユミ」という名でサイトに登録していたが、同じような名前の人物なら日本中に山ほどいる。自分だとバレることもまずないだらう。

由海は勇気を振り絞り、ヨシムリンに向かってこう送信した。

『こんにちは。あなたと同じ中学3年生のユミです。よろしくね』

まずは挨拶からでいいだらう。後は相手の反応を待つのみ。

数十秒後、相手から返信が来た。

『こんにちは、ユミさん。よろしく』

まずまずの反応だ。とりあえず無視されることはなかった。それから由海は凜にいろいろな質問をし、少しずつ接近していった。

『ヨシムリンさんの誕生日は何月ですか』

『僕は11月生まれです』

『嘘っ！私も11月生まれです』

これは本当の事だった。由海は凜が自分と同じ11月生まれであることに驚き、喜びを感じていた。

その後も、由海と凜には血液型など、いくつか共通点があることが分かり、ますます親しくなっていた。

そうしてしばらく話しているうちに、下の階からまた母親の声が聞こえてきた。

「由海ちゃん。ご飯できてるよー」

「うん、わかった。今行くよ」

そう返事をして、早く夕食を済ませて凜と会話をしようと思いいながら、由海は急いで階段を駆け下りて食卓についた。

母は準備を済ませて台所から戻ってくると、少し驚いたような顔で聞いてきた。

「どうしたの由海ちゃん。まだ制服のままじゃない」

と言われ、由海は自分が着替えていない事に気付いた。凜と話すことに夢中で忘れてしまっていたのだ。

「ごめん、忘れてた。後で着替えるよ」

由海はそう答えると急いで夕食を食べ始めた。

母は少し訝<sup>いぶか</sup>しげな顔をしていたが、それ以上は何も追求してこなかった。



## 最悪なクリスマス

それから数日間、由海と凜のネット上での会話続いた。

凜はいつも5時から6時の間と、9時から10時までの間に分けてチャットに参加していたので、由海にとっては毎日たった2時間しか話せないわけだが、わずかな間だけでも凜との会話はとても楽しく、本当に魔法で純白のドレスを着て、ガラスの靴を履き、王子様と踊っているようだった。

毎日話しかけるのは迷惑かとも思っていたが、凜はいつも優しく返事をしてくれていたし、少しでも凜と話がしたかった。

そんな日々が続き、由海は12月25日の朝を迎えた。

由海はいつも午前7時になると自然と目が覚めて、すっきりとした朝を迎えるのだが、この日はいつもと違っていた。

由海は異常な暑さにより目を覚ました。なぜか体が鉛のように重く感じる。

ケータイを開き時計を見ると「6:00」と表示されている。つまりは午前6時。いつもならこんなに早く起きることはないはずだが、今感じている異常な暑さのために早く目が覚めてしまったのだろう。由海はこの症状に心当たりがあったが、すぐにその考えを否定し、そうでない事を願った。こんなことは中学に入学してからは一度もなかったのだ。まさかクリスマスに……。

重い体を引きずりながら下の食卓に降りると、由海よりも早起きな母がすでに朝食の準備をしていた。

「お…… かあ、さん……」

うまく声が出ず、母にも届いていない。だが気配を感じたのか、母は由海の存在に気づき、振り返る。そして、すぐに彼女の様子が変だと気づいた。

「ゆ、由海！どうしたの。具合悪いの」

呼びかける母の声が遠ざかっていき、やがて目の前が真っ暗にな

った。

「ん……」

由海が目を覚ますと、そこは自分の部屋ではなく、一階の畳部屋だった。

頭にひやりとした感触を覚えて、触れてみるとやはり熱を冷ますためのシートが張ってあった。

「おっ、気づいたか」

それは母の声ではなく、男の声だった。だが由海の父は毎日朝早くに仕事に出て、夜遅くに帰ってくる。それは休日も同様であり、今家にいるはずはない。右に目を向けると誰かがそこに座っているのだが、まだ意識がはつきりしないせいか、ぼんやりとしか見えない。

やっと意識が完全に戻り、そこにいる人物が誰だか分かった。

「健介……」

「おっ」

やまやまきつとみ

山崎健介は少し照れたような顔をして返事をした。

健介は由海の家のおすぐ近くに住んでいて、苗字も由海と同じで、小学生からの同級生でもあり、由海の唯一の男友達だった。

「なんで、ここに……」

率直な疑問だった。健介とは怜奈と同じく中学2年に上がった時にクラスが離れてしまっていた。それ以来、あまり話す事もなく、お互い家に遊びに行くこともなくなっていた。

由海の質問に対し、健介はなぜか恥ずかしそうに答えた。

「い、いや、たぶん由海ならクリスマスでも暇だろうなあって思っ  
て、久しぶりに遊びに来てみたんだけどさ、由海の母ちゃんから、  
40度も熱があるって聞いたから、見舞いに来てやったんだよ」

由海は、その言葉で自分の予想が的中していた事を理解した。やはり由海は風邪をひいていたのだ。しかも熱が40度もあるとは。

「別に頼んでないんだけど」

「うるせえ」

健介に見舞いに来てもらっても、由海は全く喜べなかった。「由海ならクリスマスでも暇だろう」という言葉にも腹が立ったし、何よりも、クリスマスに風邪をひいただけでもシヨツクなのに、健介といっしょだと思うとますます落ち込んでしまった。

「私、もう寝るから、早く帰ってよ」

由海がそう言うと、健介は

「はいはい、悪かったな。お邪魔しました」

と言って出て行ってしまった。

久しぶりに健介と話したが、そんな事は喜んでいられないほど由海は苦しんでいた。寝ようと思ってもなかなか寝付けなかったが、徐々にまぶたが重くなっていった。

## 鐘が鳴るまで

その後も由海の熱はなかなか下がらず、落ち着いたのは12月31日の朝だった。

由海はその日も一階の畳部屋で寝ていた。

「おばさん、これどこに運ばいいんですかー」

そう母に聞く健介の声が聞こえてくる。

健介は由海が風邪をひいてから毎日、見舞いに来ていて、どういうわけか大掃除まで手伝っている。

「ありがとう、健介君。ホント、助かるわ」

母はそう言うが、由海はあまり快く思っていなかった。

「どういうつもり？」

休憩も兼ねて再び由海の寝ているそばに座った健介に、由海はそう聞いてみた。

「何が」

「だから、なんで毎日お見舞いに来て、大掃除までやってるのかって事」

そう由海がそう尋ねると、健介は分かり切った事を言うように

「いいじゃん、暇なんだからよー。それに、おばさん大変そうだから」

と答え、さらに

「おれんちの掃除は終わったの」

と付け加えた。

結局、健介は掃除が終わるまで母を手伝い続け、5時過ぎに帰って行った。その頃には由海の熱も平温に近くなっていた。

夕食の時になると、母が

「今日は健介君が来てくれて本当に助かったわね」

などと言うので、由海はますます機嫌が悪くなってしまふ。

「そっいえば由海、健介君と付き合ってるの」

「は？そんなわけないでしょ」

母がいきなり由海の予想もしていないような事を言い出したので、由海は慌てて否定した。

事実、健介とは小学生の頃から仲よくしてきたが、恋愛の対象として見た事は一度もなかった。

午後9時。

『こんばんは、ヨシムリン』

熱もだいぶ下がってきたので、由海は再びチャットを始めていた。『こんばんは、ユミ。しばらくチャットやってなかったみたいだけど、どうしたの?』

凜が由海の事を心配してくれたので、由海は少し嬉しくなった。

『うん、ちょっと風邪ひいちゃって。もう大丈夫』

『そうなんだ。よかった。』

それから数十秒後に、凜からまた送信が来た。

『今日は大晦日だから、12時まで起きててもいい事になってるんだ。11時からまたくるね。それじゃ』

そのメッセージを見て、由海は嬉しくてたまらなくなった。由海も毎年、大晦日は12時までテレビを見たりして過ごしてもいい事になっている。凜と話しながら年末を過ごせると思うと、心が躍った。

テレビ番組を見ている、年越しそば（カップめん）を食べていても、由海の心は落ち着かず、11時まで残り10分と言うところまで来ると、パソコンの前を行ったり来たりしていた。

そして11時まであと5分と言うところで、由海の携帯が鳴り響いた。

こんな時に誰だろう、そう思いながら電話に出ると、

「由海っ！風邪ひいたんだって？大丈夫？」

という姉の声が聞こえてきた。

由海の姉は遠く離れた県にある寮制の私立高校に通っている。

「うん、大丈夫。お姉ちゃんは今、何してるの」

そう聞くと、姉は嬉しそうに答えた。

「わ、私？私はね、彼氏と一緒になの」

姉に彼氏がいることは2年ほど前に聞いていた。こんな時間に彼氏といるのもどうかと思うが、由海は少し羨ましかった。

「そう。私はもう大丈夫だから。じゃあね。良いお年を」

由海がそう言うと、そう

「良かった。良いお年を」

と言って向こうから通話を切ってしまった。

（はあ……いいなあ、お姉ちゃんは……）

しばらくの間そう思っていたが、はっとなって時計を見ると、1時5分を指している。

由海は急いでパソコンの前に座った。

それからしばらく、由海はまた凜と話していた。内容は今日見たテレビ番組についてなどだったが、由海は今日、凜に別の事を話すと決めていた。

11時55分。

由海はついに心を決め、凜にこう送信した。

『私、あなたの事好きになっちゃったかも』

人生初の告白だった。ストレートに「好きです」と伝えるのも恥ずかしかったので、さりげなく想いを告げた。

凜からの返信が来るまでの時間が、いつもよりもずっと長く感じた。

## 魔法が解ける時

午前0時。

凜からの返信は、年明けと共に送られてきた。

それと同時に由海の携帯のメールの着信音があったが、そんなことは気にする事も出来なかった。

見るのが怖く感じたが、由海は勇気を出して凜からの返事を見た。  
『あははっ、ごめん。俺、彼女いるんだよね。マリっていうんだけどさ』

それを見た瞬間、由海は自分の中にある物がすべて、音を立てて崩れていくような気がした。

冗談だと思ったのだろう。凜はとても軽く、由海の心を打ち碎いた。

マリというのは恐らく、岡島真理おかじまりの事だろう。

真理は3年2組の生徒で、スタイル抜群、ルックスも抜群で、成績も優秀、誰もが憧れる存在だった。

「岡島さんが話してるの聞いちゃったんだけどさ」

怜奈は確かにそう言っていた。そうか、だから真理はそのことを知っていたのだ。

魔法で作られた綺麗な衣装もガラスの靴も、午前0時とともに、消え去ってしまった。

由海はしばらくの間呆然としていたが、ふと、ある事に気づいた。そういえば、さっきのメールは何だったのだろう。

恐る恐る携帯を開き、画面を確認すると、確かにメールが1件届いている。

（こんな時間に一体誰なの……）

そう思いメールを確認すると、それは健介からのものだった。

（何？なんでこんな時間に……）

健介からメールが来るのは初めてだ。中学1年生の時にアドレス

を交換するにはしたものの、結局お互い使った事は1度もなかった。それが今届く事自体、あり得ないことだったが、メールの内容はさらにあり得ないものだった。

『Happy new year.I love you』

見た瞬間、由海は思わず吹き出してしまふ。

(は……？何これ)

まったく意味が理解できない。英文も健介にはまったく似合わなかったし、「Happy new year」はいいとしても、「I love you」とは一体……。

訳が分からず、どう返信したらいいかも分からない。いや、そもそもこれは返信するべきなのだろうか。

混乱して、凜に振られたショックなどすっかり忘れてしまっていた。

考えても仕方がないので、由海はとりあえずベッドに入った。

もう風邪は治っているというのに、やはりなかなか寝付けなかった。

午前7時。

由海はベッドからはね起きるや否や、すぐに携帯を取り、健介に電話をかけた。

数秒後、寝ぼけ気味の健介の声が聞こえてくる。

『ん、もしも……由海か？あけましておめでとっ』

だが由海は新年の挨拶はせず、いきなり疑問をぶつけた。

『ちよつと健介！なんなの、あのメール』

その一言で、健介は完全に目が覚めたようだ。

『み、見たのか』

まるで見て欲しくなかったかのようだ。

『見たよ。てか、全然似合わないし。なんなの、『I love you』って』



『い、いや……だから、その……』

しばらくの沈黙の後、健介はいきなりこう続けた。

『す、好きなんだ！お前の事。ずっと好きだった。小学校の時から……』

突然の告白に、由海はどう返せばよいのかも分からなくなってしまう。

『それで、来年卒業したら、お前とも話せなくなると思って、だから！その前に伝えたくて……』

それは由海の凜に対する思いとまったく同じものだった。

『だから、由海！お、俺と……付き合ってくださいませんか』

その丁寧な頼み方も健介らしくない。だが……、由海はこれまでの事を思い返してみた。

由海にとって健介は親友であり、それ以上の感情を持った事は1度もなかった。

そして、由海は凜の事をずっと思い続けていた。できれば、諦めたくはない。だが、凜にはあまりにもあっさりと振られてしまった。凜はどんなに思い続けても、絶対に手の届かない存在だろう。

一方、健介は由海が風邪をひいている間、ずっとそばにいてくれた。健介なら、どんな時でもそばにいて、守ってくれる気がする……。

由海の心は決まった。

## 私の王子様

「ごめん！」

冬休み明けの始業式が終わって下校時間となり、由海が校門を抜けようとした時、いきなり怜奈がそう言いながら追いついてきた。かなり急いできたのだろう。息が乱れている。

「ホントごめんね、由海！今日……岡島さんが……実は凜君と、付き合ってるって……私、知らなかったの。ごめんねえ……」

怜奈はそう言いながらすでに泣きそうになっている。

「ああ、そのことか。いいんだよ、怜奈。もう全然気にしてないから」

由海は本心からそう言ったのだが、怜奈は自分に気を使っていると思っただけ、なおも執拗に謝ってきた。

「ホントごめん！ほんとに……」

「おい、由海！」

ちょうどその時、後ろから誰かの呼ぶ声が聞こえてきた。振り返ると、やはり健介がこちらに向かってきている。

「おい、由海。置いていくなよな。てか、ひよつとしてお前、俺と付き合ってる事忘れてないか」

「ああ、ごめん。忘れてたかも」

と冗談交じりにそう言うのと、

「おい！そういうの、マジで傷つくぞ……」

と健介は少し落ち込んだように見えた。

「ごめんごめん、冗談だよ、冗談」

由海がそう言うのと、健介は落ち込んでいたのが嘘のように明るくなり、

「そうか！じゃ、一緒に帰ろうぜ！」  
と言ってきた。

「うん、いいよ。怜奈ごめん。そういうわけだから、今日は健介

と一緒に帰るね」

由海がそういつて怜奈の方を見ると、由海と健介の関係を知った怜奈は驚きのあまり、口をあぐりと開けて固まってしまっている。「おい、怜奈。大丈夫？」

由海が呼びかけても怜奈は全く反応せず、ただ口を開けて突っ立っている。あと数分はこのまま動かないかもしれない。

「じゃあね、怜奈。行こつ、健介」

そういつて由海は健介の手を引っ張って歩いていった。怜奈には悪いが、今日は健介と帰りたかったのだ。

健介からの告白を受けたあの時、結局、由海はOKを出した。どうやっても手の届かない王子様を追い続けるよりも、自分だけを見てくれる、自分だけの王子様を選んだのだ。自分でそう考えて、由海は可笑しく笑ってしまった。健介が不思議に思い、見つめてきたが、なぜ由海が笑っているのかは絶対に、誰にも分からないだろう。

健介に王子様なんて言葉は絶対に似合わない。でも本当に、凜よりも素敵な人だ。由海はそう思った。今では凜に対して何の恋愛感情も抱かない。やはり自分には合わない人だったのだらうと由海は思った。

魔法なんてものを使わなくても、ガラスの靴が無くても、自分を見つけてくれる人が、本当の王子様なのだから。

## 私の王子様（後書き）

最後まで読んでいただいた方、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0430ba/>

---

年越しシンデレラ

2011年12月31日23時49分発行